



# 長浜市文化財ニュース

編集・発行 長浜市文化財保護センター

〒526-0802 滋賀県長浜市東上坂町981

TEL:0749-64-0395 FAX:0749-62-6357

E-mail:bunkazai@city.nagahama.lg.jp

ホームページ:http://www.city.nagahama.shiga.jp/

第201号

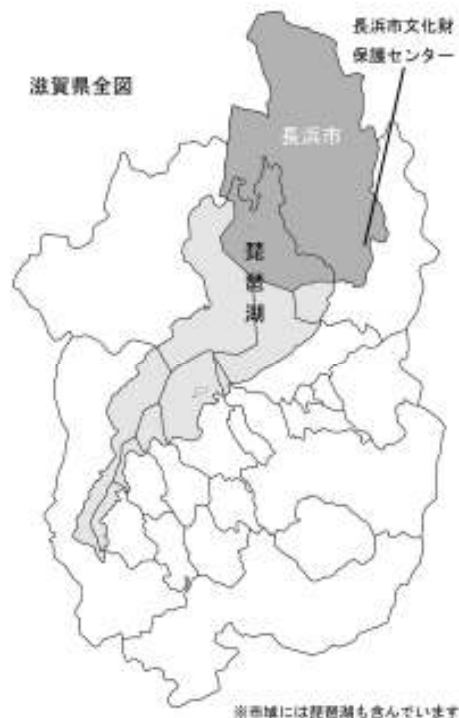
## 1：市町合併と新しい長浜市の文化財

平成22年1月1日、長浜市は虎姫町、湖北町、高月町、木之本町、余呉町、西浅井町と合併しました。面積は約540km<sup>2</sup>（琵琶湖を除く）で県下ではトップ、人口は約12万5千人で大津市に次いで2番目となりました。

保有する文化財についても、指定文化財数は423件（国指定文化財109件、県指定文化財85件、市指定文化財229件）となり大津市に次いで2番目、遺跡数は795遺跡と県下ではトップとなりました。

長浜市は北國街道や、この街道と中山道を結ぶ最短経路であった北國脇往還沿道、戦国時代を偲ばせる史跡長浜城跡や史跡小谷城跡、賤ヶ岳古戦場、姉川古戦場をはじめ全国でも有数の戦国時代の城郭群や竹生島の宝厳寺、向源寺の国宝十一面観音をはじめとする数多くの美術品や姉川、高時川、田川などの豊かな水に恵まれ、物流の要衝として栄えた菅浦、大浦と琵琶湖を含む文化的景観など、すぐれた歴史的遺産を有しています。

数多くの文化財を保有する市となり、その適切な保存・活用をすることが非常に重要です。今後の文化財保護センターの役割は大きいと考えています。（森口）



合併にともなって、新たな担当職員を迎えました。以下、新スタッフより一言ごあいさつ申し上げます。

### ・山崎清和副参事（旧湖北町より）

旧湖北町教育委員会から長浜市文化財保護センターに寄せていただきました山崎清和です。今までは、旧湖北町域での文化財保護行政に携わってきましたが、新長浜市では、広い範囲で、数多くの優れた歴史文化遺産の保存と活用に携わらせていただくことになりました。皆様のご指導を賜りますようお願いいたします。

### ・黒坂秀樹副参事（旧高月町より）

1955年兵庫県姫路市・播磨国生、温暖な瀬戸内海育ち。大学卒業後、(財)滋賀県文化財保護協会を経て旧高月町教育委員会。得意分野は埋蔵文化財・地域史（特に弥生～古墳時代、古代寺院、玉作など）。学生時代より守山市服部遺跡をはじめとして滋賀県下の遺跡調査に参加して35年以上経過。あまり知られていない湖北地域の文化財（特に遺跡）を全国区にするべく努力したい。現在、妻・長女・次男とともに彦根市在住（生まれ育った環境のせいか、すぐそこに城が見えないと落ち着かない）。

・福井智英主査（旧虎姫町より）

はじめまして。旧虎姫町教育委員会から異動してきました福井智英です。新長浜の地には先人から引き継がれてきた歴史遺産が数多くあります。貴重な「地域の宝」に携わる責任ある仕事として、文化財と地域の皆さんを繋ぐ“夢のかけはし”となれるよう、精一杯取り組んでいきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします(^-^)

・沢村治郎主査（旧高月町より）

旧高月町出土文化財センターから参りました沢村です。今までは旧高月町だけで発掘調査などをしていましたが、これからは範囲が長浜から余呉・西浅井までと広がりますので、一から勉強するつもりでがんばりたいと思ひますのでよろしくお願ひします。

2：三田村氏館跡確認調査（三田町）

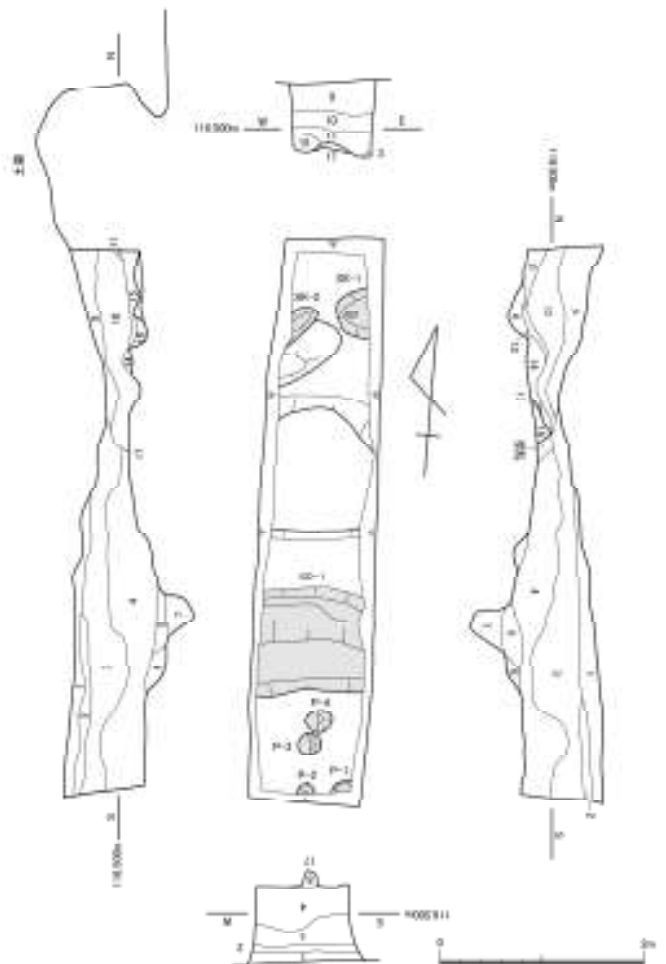
元龜元年（1570）の姉川合戦の際に、朝倉軍の本陣が置かれたと考えられている三田村氏館跡は、平成19年7月26日に国史跡に指定されています。

今回行った確認調査は、国史跡範囲の北部に接する、追加指定候補地内での調査で、4か所のトレンチ（T-1～4）を設定し、遺跡の範囲を確認し保存することを目的としたものです。

三田村氏館跡のこれまでの調査からは、館を囲んでいた土塁が、最初に16世紀の初頭頃に造られ、防衛力を増すように16世紀の前葉頃に倍近くの高さに改築されるという、2つの時期から造られていること、また、全国でもあまり例を見ない、土塁の内側に土塁と並行する郭内（土塁の内側）の排水機能を持っていたと考えられている、2条の溝があったことが分かっています。

では、土塁が造られたそれぞれの時期の湖北地方の状況はどうであったのか、また、三田村氏との関係についてはどうであったのかについて、少しふれてみたいと思ひます。

三田村氏館跡の古い段階の土塁が造られた時期、つまり16世紀の初頭頃は、三田村氏とも関係の深い京極氏が、現米原市にある上平寺に居館を構えたとされる永正2年（1505）から大永3年（1523）と同じ時期にあたります。『江北記』には、三田村氏は京極氏の古くからの家臣（根本被官）であったと見え、京極氏との関係の中で三田村氏が土塁で囲まれた居館を構え、在地での土豪としての地位を確立していった様子をうかがうことができます。



トレンチ1平面・断面図

次に新しい土塁が防御力を増すように改築された16世紀前葉頃についてみてみます。

この時期の江北は、守護大名から戦国大名へと地域支配のありかたが変わっていく、つまり京極氏から浅井氏へと政権が交代する時期にあたります。三田村氏も政権の移行に伴い浅井氏の家臣となっています。このことは、浅井氏が勢力を拡大していく中で、在地土豪との関係を強化していった結果であるとも考えられます。

こうした情勢の中、三田村氏も自らの居館の防御機能を高める必要性が生じ、土塁の改築を行ったと推測することもできるのではないのでしょうか。

今回の確認調査からは、遺跡の時期の決め手となる土器類があまり出土しておらず、過去の調査で得られたような明確な結果は見られませんでした。T-1からは、土塁内部の溝跡が1条見つかっています。また、土塁の土層からは、土をたたき締めながら造られている層と、礫を多く含む土を積み上げているだけの層とが確認されており、過去の調査と同様の造り方がされている可能性も考えられます。(山本)



トレンチ1平面写真

### 3：長浜の歴史見聞学「平安時代の仏像と新指定文化財を訪ねて」

去る11月29日（日）、長浜の歴史見聞学「長浜の文化財散歩－平安時代の仏像と新指定文化財を訪ねて－」を開催しました。当日は曇天の寒空の中、市内・県内はもちろんのこと、東京や岐阜・愛知といった遠方から40名の方々にご参加いただきました。

今回の歴史見聞学は、11月1日（日）開催の文化財講演会に関連して、平安時代の重要文化財の仏像に焦点を当て、多田幸寺（田村町）の薬師如来坐像、光信寺（太田町）の大日如来坐像、珀清寺（瓜生町）の薬師如来坐像、来現寺（弓削町）の聖観音立像を拝観しました。拝観に際しては文化財保護センター職員が仏像の特徴や変遷についてわかりやすく解説し、その魅力に迫りました。

あわせて平成20年度に新たに長浜市の文化財に指定された非公開の赤田氏庭園、鍛冶屋町の鍛冶小屋、鍛冶道具等も見学し、長浜の文化財の見聞を深めていただきました。

最後にこの事業を開催するにあたって、拝観・見学にご協力をいただきました文化財所有者の方々に対して感謝申し上げます。(二宮)



多田幸寺本堂にて



赤田氏庭園の見学



瓜生の収蔵庫で仏像を参拝

## 4：長浜市文化財講演会「湖北の長浜の仏像と、守り続ける人びと」

平成21年度の長浜市文化財講演会は、講師に土井通弘氏（岡山・就実大学教授）をお迎えし、「湖北長浜の仏像と、守り続ける人びと」と題して11月1日（日）に開催しました。当日は38人の方が参加になりました。以下、講演の概要です。



土井通弘氏近影

滋賀では、平安時代以降天台宗と白山信仰の発展の中で衆議の文化が培われ、それが惣村（自治村落）を生みだし、宮座を中心として人が集まるといった慣習を育んできました。その全会一致の原則や徹底的な議論といった自治村落の意識が、自分たちの暮らしを守るとともに、結果として現在私たちが文化財と呼んでいるものを遺してきました。

明治21年（1888）に設置された臨時全国宝物取調局では、岡倉天心らによって10年間にわたって全国の社寺で宝物調査が行われましたが、この調査が始められたのは滋賀県からでした。1か月半をかけて7,530点もの調査が行われ、湖北においても、木之本・浄信寺や高月・渡岸寺観音堂の調査とともに、長浜・慶雲館において舎那院や宝巖寺の宝物調査が行われました。

長浜には明治30年代に旧国宝に指定された仏像が何件もありますが、他府県では明治の指定は少ないのが普通です。これは、この地域の文化財がひじょうに優れていることを示すと同時に、国策として行われてきた文化財保護行政が滋賀県を保護してきたことを示しています。それは、現在でも国の補助金が、京都・奈良とともに滋賀を特別枠としていることからもうかがわれます。

長浜市内には、山林修行者の拝む像として造立され、厳しい表情をもった珀清寺薬師如来坐像や、裳に刻まれた渦文や、深い衣文線、大作りの顔などからすぐに古い作とわかる来現寺聖観音立像など、優れた平安時代の仏像が伝わります。これらの像が舎那院や総持寺といった長浜の大寺院に残されているのは、とくに不思議もないところですが、今はない寺に平安の古像が伝わっているのは、いったい誰が残してきたのでしょうか。それは宮座を守ってきた人びとであるといえます。



岡山の事例ですが、余慶寺千手観音立像の像内納入品からは、この像が農民である余慶寺の檀家衆によって江戸時代に修理されたことがわかります。文化財の世界には「文化財は常に権力の側にあった」との意見がありますが、少なくとも守り伝えたのは民衆であり、これは農民が主体となって修理に関わったことが知られる一例です。

現在、県内の博物館・美術館の休館が相次いでいますが、文化財保護行政が始まって120年、ようやく市民が主体となって文化財と関われる場であるはずの博物館を、今滋賀県は手放そうとしています。文化財の分野では全国的にみても先進地である滋賀県が、村落で守り伝えてきた文化財を今後どうしていくのか、そのモデルケースとして全国から注目を集めています。（編集：秀平）



## 5：新埋蔵文化財包蔵地「外谷遺跡・外谷古墳群」について

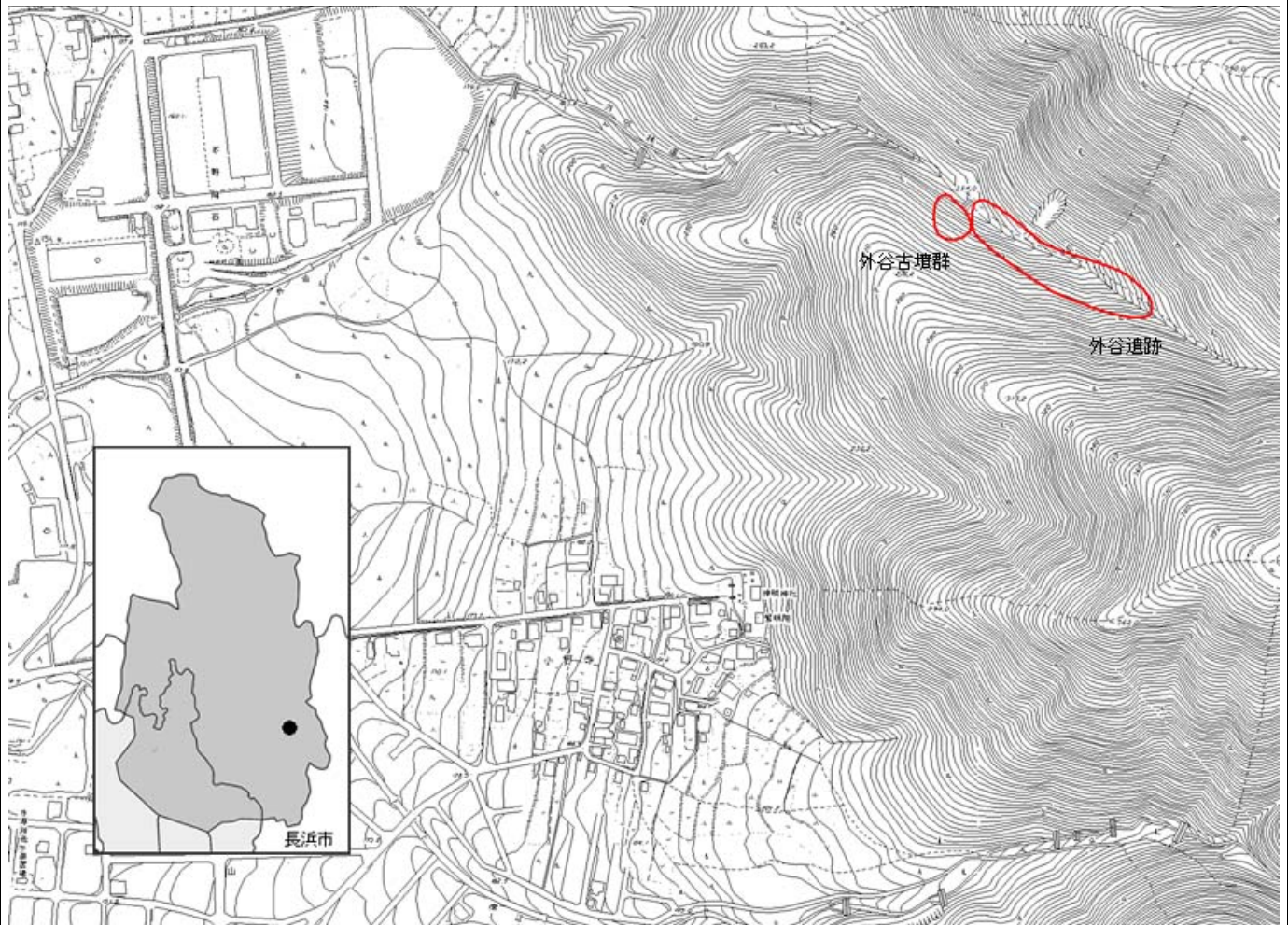
滋賀県教育委員会が行った発掘調査や周辺の踏査の結果に基づき、以下の遺跡が新たに周知の埋蔵文化財包蔵地となりました。(池寄)

### ①遺跡名：外谷遺跡

所在地：長浜市醍醐町      種類：その他      時代：近世～近代      立地：山腹      現状：山林  
備考：平成19・20年度に滋賀県教育委員会が実施した発掘調査の結果による。

### ②遺跡名：外谷古墳群

所在地：長浜市醍醐町      種類：古墳群      時代：古墳      立地：山腹      現状：山林  
備考：平成19・20年度に滋賀県教育委員会が実施した発掘調査地周辺の踏査の結果による。



## 6：南小足遺跡第14次調査（南小足町）

個人住宅新築に伴う調査で、対象面積462.81㎡の内88㎡について調査を実施しました。

調査の結果、現況面以下0.94mが暗褐色礫で盛土、0.94m～1.02mが青灰色極細砂で田土、1.02m～1.08mが灰黄褐色中礫少量混極細砂、1.08m以下が灰オリーブ色細砂で地山。

遺構面を精査した結果、墳丘長6m（東西）以上×墳丘幅3m（南北）以上の方形周溝墓1基と墳丘長6m（東西）以上×墳丘幅2.5m（南北）以上の方形周溝墓を1基、合計2基の弥生時代の方形周溝墓を確認しました。方形周溝墓の主体部は削平を受けて消失しており、周溝墓を区画した溝が残存していました。溝の中から弥生時代中期の土器が出土しています。（牛谷）



南小足第14次

## 7：長浜町遺跡第112次調査（元浜町）

長浜町遺跡は秀吉が建設した長浜城下町に始まる集落遺跡として周知されている遺跡です。今回の調査はホテル新築工事に伴う試掘調査で、調査対象面積555.41㎡に対して、1m×3m程度の試掘トレンチを4か所設定し、約12㎡について調査を行いました。

調査の結果、約0.6mの造成土の下に、灰色粘土が0.14m、その下に灰褐色粗砂がおおよそ0.2mが堆積している状況が観察できました。その後検出された褐色粗砂混土が地山面と考えられ、現況からの深さがおおよそ1.0mであることがわかりましたが、明確な遺物・遺構等は確認できませんでした。（池寄）



長浜町第112次 土層堆積状況

## 8：地福寺遺跡第40次調査（地福寺町）

個人住宅新築に伴う調査で、対象面積454.54㎡に対し2か所のトレンチを設定し、2㎡について調査を実施しました。

調査の結果、現況面以下0.35mが灰黄褐色細砂、0.35m～0.60mがにぶい黄褐色シルト混細砂、0.6m以下が灰色細砂混シルトで地山。遺構・遺物は確認できませんでした。（牛谷）



地福寺第40次 土層堆積状況

## 9：宮川陣屋遺跡第5次調査（宮司町）

個人住宅新築に伴う調査で、対象面積406.61㎡に対し1か所のトレンチを設定し0.5㎡について調査を実施しました。

調査の結果、現況面以下0.1mが黄灰色細礫、0.1m～0.65mが暗灰黄色細砂、0.65m以下が暗灰黄色中礫で地山。遺構・遺物は確認できませんでした。（牛谷）



宮川陣屋第5次 土層堆積状況

**編集後記** 広域合併にともなって、さっそく消防署による防火査察で随行する範囲も広がりました。西浅井町や余呉町にはセンターから車で1時間近くかかる所もあります。新長浜市の広さを実感していますが、今まで知らなかった文化財との出会いは楽しみなものです。（平成22年2月発行）